
月館と鈴

?島イロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月館と鈴

【Nコード】

N3418U

【作者名】

? 島イロ

【あらすじ】

宮野鈴はある日、社会科教諭の月館から子猫を渡される。それから子猫の報告も兼ねて社会科教諭室へたびたび足を運ぶようになる鈴だが、他人を静かに拒むこの教師が気になって仕方がない。一方、月館はある秘密を抱えていた。そのせいで鈴に本音を言えない。冴えない教師と優等生の切ない恋のお話。

それは人気のなくなつた放課後でのことだつた。

絵筆を片付け美術室に鍵をかけようとしたとき、宮野鈴は隣の社会科教諭室からよつきと伸びた腕を見た。ドキリとした。ここにこんな時間に人がいるとは思つていなかったからだ。社会科教室など授業でも部活動でも使用している者はいない。社会科の教師たちもまた、四階の隅っこにある埃だらけの教諭室に来るよりも、二階の職員室で用を済ましてしまう。言わば開かずの間と言つて等しい。鈴は放課後の学校につきものである「怪談」の一種だと思つたが、教諭室から伸びた腕は透き通つてはおらず、はっきりとした輪郭を持っている。腕は鈴の存在を感じたのか、手首を動かした。鈴を招いているようだ。

恐る恐る近づくと腕は引つ込み、静かに扉が開いた。夕陽を背に、男のシルエツトが現れた。誰か確認する前に鈴の胸元に生温かくてふさふさしたものがくつき、条件反射で受け取ってしまった。小さなそれは腕の中で小さく「にゃあ」と鳴いた。

慌てる鈴をよそに、男は次にデパートの紙袋をよこしてくる。

「この中にだいたい^の道具と飼育方法が書かれたメモが入っている。名前はまだない。よろしく頼む」

男はそれだけ言つと、ぴしゃりと扉をしめた。質問をぶつける暇も与えない。鈴は呆氣にとられたまま立ちすくんでいたが、子猫の鳴き声で我に返り、目の前の扉をみつめた。堅く閉ざされた扉は二度と開く気配はないように感じられ、抗議するのも諦めた鈴は子猫を抱きながら学校を後にした。

電車に揺られ、膝の上で眠る子猫の身体をさすりながら男のことを思い出した。

おそらく今年赴任してきた社会科の教師、^{つきだて}月館昇流^{のぼる}だろう。

春、二年に進級した年の始業式、新任教師たちは壇上にて挨拶を

する。今年は四人の教師がいたが、その中で月館は自分の名前と担当教科、最後に「よろしくお願いします」と付け加えた控え目な内容だった。三十歳ぐらいなのだろうが、無表情で陰気で大人しい雰囲気か老けた印象を受ける。他の生徒は月館よりも、そのあとに現れた若くて誠実そうな英語教師に注目し、いろいろな意見を交わしあつた。すでに生徒たちからは月館の存在が消えていた。

しかし、鈴は檀上から下りて行く月館の姿を目で追っていた。ほぼ無意識だ。陰気な教師などたくさんいる。珍しい部類ではない。ただ、鈴は原稿用紙三行に満たない彼の挨拶を何度も心の中で反芻していた。低く、胸の奥まで響いてくる声が好きだった。

子猫を渡してきた男の声は、鈴の好きな声をしていた。月館は歴史を主に教えている教師で、歴史は一年のときに終わっている鈴の担当にはならない。彼の声を聞くのは一か月ぶりのことだが、あの低音は忘れてはいなかった。

1

昼を告げるチャイムが鳴ると、鈴は鞆を持って教室を出た。三階の教室から一階中庭へ出て、真向かいの東棟の方へ進む。建物の一番端にとつてつけたような非常階段を四階まで登ると、鞆から取り出した緑のタータンチェックのブランケットを踊り場にひき、その上に座つて弁当を膝の上に乗せた。

東棟は音楽室や実験室などの特別教室しかなく、特に四階には滅多に人が来ない。それに誰も非常階段など使わない。存在すら知らない者もいるだろう。座ればコンクリートの壁に隠れて鈴の姿は外から一切見えなくなる。ここは鈴にとって、学校で独りになれる数少ない場所だった。

弁当を食べ終わった後は壁に寄り掛かって読書をする。耳にはシヨパンの幻想即興曲が遠くから聴こえてくる。音楽室の窓が開いて

いるんだろう。昼休みに決まってピアノの練習をする生徒がいるのだが、特定の人ではないらしい。今日は昨日のシヨパンよりずっと上手い。MP3プレーヤーの出番はなさそうだ。

予定より早く本を閉じた。太宰治を読むには精神力が要するため、長く集中することができない。気分転換に立ちあがって背伸びをしたところで、非常口の向こう側で扉の閉まる音がした。刹那、社会科教諭室の扉が動いたことを確認する。

鈴は少し迷ってから、この間の子猫の件を報告に行こうと思った。鞆に本とブランケットを詰め込んで非常口から四階廊下に出た。歩きだすと、反響した足音が響く。社会科教諭室の前に来て、やはり少し躊躇ってから静かに扉を叩いた。一回、コンコン、間が空いて中から「どうぞ」という声。「失礼します」とできるだけ音をたてないように扉を開ける。

目の前にはアルミ製の本棚が立ちはだかっていた。バラバラに収まった本と本の隙間からあちらの様子を覗く。電気もつけず、カーテンから漏れた日の光が空中に舞っている埃を映し出している。その中に今にも崩れそうに積み重なった洋書に囲まれて、背中を丸めて一心にペンを動かしている月館の姿があった。

扉を閉めてもこちらを向く様子はない。鈴は覗き込むように奥へ進んだ。

「月館先生」

名を呼ばれて、初めて月館は顔を上げた。しかし、鈴の存在を目で確認すると、すぐに顔を俯けてレポート用紙にペンを走らせた。

「なんだ」

月館は作業をしながら言った。邪魔をされたくはない様子でもあったが、生徒への気遣いなのか口調は優しさも含まれている。

「この前の子猫の名前、アポロ13にしました」

「そうか、それは良かった」

名前の由来を訊いてくれると踏んでいたのだが、月館はそれ以上何も言わなくなった。子猫を無理やり押し付けたのだから、もつと

興味を示せと内心苛立ちながらも、次の言葉を探した。だが、何を話せばいいのかわからない。人付き合いは苦手じゃないが、月館は何を考えているのかわからないため、どう話をきりだせば良いのか迷ってしまう。この分だと、誰もこの男と親しくなるうという気が削がれるに違いない。鈴はそう思いながら、手近にあった分厚い洋書を手に取った。上等な革張りの表紙は色褪せていて、何人もの手を渡った歴史がこびりついていた。ページを捲ると、ギリシア神殿のような形式の遺跡の図が現れた。

「バールベック遺跡、中東紛争とレバノン内戦のため、長い間バルベック遺跡へは外国人観光客の立ち入りが禁止されていた 聞いたことない遺跡ですね」

鈴が読み上げると、一心不乱に動かしていたペンが止まり、月館の顔が上がった。細い目から驚きの輝きが発せられていた。

「君、読めるのか」

「英語なんで、なんとか」

「ああ、ああそうか」 月館は頭を掻きながら「宮野はそうだったな、それぐらい読めるな」と独り言のように呟いた。

「文系は得意ですが、理系は苦手です」

「他の者が聞いたら嫌味に聞こえるな。学年トップの者は、そんなこと言わない方がいい」

次に鈴が驚きの声を挙げた。

「私のこと、知ってるんですか」

「少なくとも、教師の間では有名さ。君ほどの優秀な人間がなぜこんな学校に来たのかわかってね」

胸が微かに躍る。鈴は知名度よりも、何も関心がなさそうな月館が自分のことを知っていたということが何より嬉しかった。素直に口元が緩む。

「先生は遺跡考古学に興味があるんですね」

「興味という次元ではないな。生涯を懸けてもいいと思っていた」
首を傾げ次の言葉を待つ生徒に月館は続けた。

「母親が身体を悪くして、海外の大学に進めなくなった。日本の大学ではできることが限られてくるから――」
と、そこで自嘲気味に笑い席を立った。「教師の愚痴なんぞ面白くないな。すまん」

月館は窓辺に移動し、棚に置かれたカップにインスタントコーヒーを淹れた。安物の独特な香ばしい豆の香りがたちこめる。

「ご両親は、それからどうなったんです」

「母親は三年前に亡くなった。父親はとうの昔にいない。この歳になると行動力が鈍っていかんな。情熱というものが冷めて夢は暗く沈んでるよ」

窓の外を見やる男の背中には虚しさで染まっていた。グレーの背広が皺だらけに、後頭部の若白髪が目立っているせいもあるかもしれない。しかし、それ以上に何かを諦めるために自分に嘘をついて誤魔化すしかない、そうして生きているのだ、だから私はこの人を哀れに見えてしまうのだ。と鈴は思った。そうでなければ、こんな公立高校の一室であんなに無我夢中に古代遺跡について研究するはずはない。

彼女は月館の真横に立って、彼の横顔を真つ直ぐに見据えた。陰りのある顔の周りに、埃がきらきらと輝いている。

「私、月館先生に学びたい」

宮野鈴は優秀だった。それゆえに、自ら教師に知識を求めたりはしなかった。また、教師は知識以外は何も産みだしてはくれないとも、どこかで失望を抱いていたものだ。そんな彼女が初めて、教師を求めた。知識以外の何かを、この人は自分にくれる。そう確信したのだ。

「僕が君に？ 一体何を教えればいい。歴史は一年で終わったはずだろう」

「教室で学べることはいいの。ここでしか学べないものを教えてほしい。例えば、せっかく拾った子猫を行きずりの生徒に押し付けないといけないほど熱心に研究していることとかをね」

にこりと微笑む無邪気で可愛らしい生徒の笑顔に、月館は拒否の言葉すら忘れて見つめた。

「君は変だな」

「褒め言葉です。これからよろしくお願いしますね」

月館は諦めの息を吐いたが、鈴はそれを了承の合図だと受け取った。

2

それから鈴は宣言した通りに昼休みに月館の元へ訪れることが多くなった。遺跡や高等学校の教科書には載っていないような歴史の話をし、アポロ13号と名付けられた子猫のことや、とりとめもない雑談をした。月館は興味のないことでも聞いているふりはするのだが、鈴は敏感に察知して話題を変えたりもする。自分にはできないことなので、月館は関心していた。

昼休みだけではなく、放課後も鈴は社会科教室に行く。これはほぼ毎日と言っていい。美術部の部活があっても、帰りには必ず隣の社会科教諭室の扉を開け、挨拶をしていく。

ある日、月館は背後で扉をたたく音を待っている自分に気がついて不思議な気分になった。

実は、月館は以前から宮野鈴の存在を知っていた。学年トップとこの学校に着任して最初の授業が終わった日だった。月館は社会科教諭室へ最短距離で向かうため、中庭を突っ切って東棟の非常階段を上って行った。四階に差し掛かったところで、ブランケットの上で眠っている生徒がいて驚き、足を踏み外しそうになった。よろけた拍子に間抜けな声を出したが、生徒は起きることなく寝むり続けていた。

月館は昼休みに非常階段を使わなくなった。そして、その生徒が放課後になると美術室へ来ていることも知った。現在、美術部員は

3人。内二人は実質的に幽霊部員に近い。一人で黙々と、キャンパスに絵筆を叩きつける姿を廊下の窓ガラス越しに見たことがあった。職員室で、たった一人の美術部員は宮野鈴だと噂で聞いた。同時に彼女の秀才ぶりも担任と思われる教師が話していた。

良くも悪くも彼女はこの学校では浮いた存在であり、そのせいか部室だけでなく普段から独りであることが多い。決して苛めを受けているふうでもなく、他の生徒を見下して避けているふうでもなかった。彼女は他人に知られないように、他人から一線を引いて過ごしていた。周りはそれに気づかず気軽に彼女に話しかける。彼女もまた、人懐っこい笑顔で応える。

そんな宮野鈴が、今は月館の元へ自ら訪れている。それが不思議で仕方のないことだったのだ。

自分はからかわれているのかもしれない

帰りの車内で、ハンドルを握りながら月館は思った。優秀な生徒が、暇つぶしにウダツの上がない教師にちよっかいを出してくるのは良くある話だ。

とは言っても、拒否するには時間が経ちすぎた。何か理由がなければ、彼女は納得しないだろう。

悪い癖だ。生徒から慕われると拒否することができない。何の取り柄もない自分が必要とされることに酔っている。わかっているが、それが今の彼の生きる糧でもあった。

車を三階建ての古いアパートの駐車場に止め、階段を上って二階、角の部屋の扉を開けた。明かりを点けると、埃っぽい部屋の中に資料やファイル、海外から取り寄せた洋書などが大雑把に積み重なって山をいくつも作りだしていた。その間を縫うように進み、デスクに置かれたプラスチックの書類棚に手を伸ばす。一段目の引き出しからA4サイズの茶封筒を取り出し、膨らみを指先で確認してから、また同じ場所に戻した。彼が自宅に帰ってきて、まず初めにする儀式だ。それからようやく鞆を置き、上着を脱いで椅子に座った。

しばらくボンヤリと宙を仰いでから、席を立ちカップ麺のために

お湯を沸かす準備をしようとした時だ。携帯電話が鳴った。鞆から取り出し、着信相手を確認してからボタンを押す。「はい」と言う声は落ち着いていたが、気持は幾分か緊張していた。

「先生……ごめん」

電話の向こうで、男が震える声で言う。それだけで、月館は男が何を望んでいるのかを悟った。

「いや、そういう約束だ。謝ることはない」

「けど、俺、変わってないから」

月館は壁に掛けられたカレンダーを見た。蒼の紫陽花が雨露に濡れて咲いている写真が美しい。

「以前よりも間隔が空いてきている。良い兆候ではないか」

「そうかな、そうだといいな」

男は少し笑って「頑張ってるけど、怖くて……、殴られると痛いっていうか怖いんだ」と呟いた。

「うん、お前は頑張ってるよ。大丈夫だ。だから、いつでも取りに来い」

「ありがとう先生。本当にありがとう」

男は何度も謝り、途中でぶつくと突然切れた。テレホンカードが小銭が切れたのだろう。

携帯電話をデスクに置き、沸騰したお湯をカップ麺に注ぎ入れた。出来るまでの三分、先ほどの電話の内容を思い返す。男の顔とそれから宮野鈴の屈託のない笑顔が脳裏にちらついた。

この二人と出会うことがなければ、こんなカップ麺を食べることなく永遠に眠り続けることができたのに。

自分の運命に恨み事を述べ、コンビニで貰った割り箸を割った。

食べ終われば、インカ帝国の遺跡について研究する。日付が変わる前に風呂に入り寝る。

これが、この男の日常生活だった。

梅雨入りした。遠慮がちにしとすと降る雨を見て、明日はもっと降るかもしれないと鈴は憂鬱になる。雨は嫌いだ。

美術室には寄らず、そのまま月館の元へゆく。仕事の邪魔をしたくないので放課後はできるだけ部活に専念するようにしていたが、今日はあまり気が乗らない。昨日、顧問の丸山から進路について言われたせいだ。丸山は何かと国立の芸大へゆくことを薦めてくる。口説き文句は大抵「才能あるのにもつたいない」だった。

鈴は能力はあるが夢や希望というものがなく、未来に対して消極的である。そのつど、周りからは「もつたいない」と同じ言葉をうんざりするほど聞かされていた。

鈴は絵の才能がないことを自覚している。そこそこは描けるし描くことは読書と同じぐらい好きだが、それで食べていく気など更々ないのだ。

「ねえ先生、どうしてみんな、私に期待するの。将来の夢はないって言ったら、口をそろえて「もつたいない」って、聞き飽きた」

「そりゃあ、とても吸引力のある掃除機を使わずに押入れに放置していたら、誰だつてもつたいないと思うだろう」

「だからって、使え使えっておかしいですよ。使い方知らないのかもしれないし、それほど吸引力がなかったから放置してるのかもしれないじゃない」

「君は使い方を知らないのか、それとも自分に自信がないのか」

「例えばの話です。その掃除機は私のものだから放置しようが売ろうが私の勝手です」

「それはそうだ　何かあったのか」

「何かって……いつものことです。ただ、丸山先生にまで言われるとは思ってなかった」

「君によほど絵の才覚を見出したのかな」

鈴は首を振る。

「そうじゃない。自分の教え子から良い大学に入った者が出れば、教師の評価はあがるでしょ。だから丸山先生は私に進学を薦めるんです。そのせいで疑心暗鬼になってしまってるのかも」

「ないとは言えないが、少なくとも丸山先生は君の絵が好きなんだよ。嫌いな絵を描く人に進学なんて無理やり薦めないだろう」

うーんと唸って黙り込む鈴。

あまりにも周囲から期待されすぎていたために、良心から鈴のことを心配しているのか、利益のために鈴に近寄ってきているのかわからなくなってきた。見極めは大変難しく疲れる。

「宮野の絵、見てもいいか」

「いいですよ、ぜひ」

美術室に向かった二人は、教室の後ろに立てかけられたキャンバスの前に立った。一メートル四方の板に黒と紺と蒼が混ざり合った夜空の絵。波打つ水面に光が差し込んでいる。

いや、これは海だ。深い海の底から見上げた夜空に、月が映り込んでいる。

冷たく暗い、寂しい絵だが、海底に優しく降り注がれる光が不安な気持ち落ち着かせてくれる。

「未完成ですけど……思ったように描けなくて」

「ああ」

「ね、酷いでしょ。何が描きたいのかわらなくなってきたの」

「いや、いいよ。いい絵だ」

「先生までそんなこと言う」

「素人の僕が言うんだ。間違いない。この絵は好きだ」

「そう?」

「僕が君をお世辞で褒めても、何の得にもならんだろう」

「そうね。うん、ありがとう」

「信じてくれるのかい」

「だって、先生って嘘が下手なんですもの。本当か嘘かすぐにわか

ります」

苦笑する月館に、鈴はニコリと微笑みかけた。

そうだ、この人は少なくとも私に対して嘘をつかないしつけない。だから私もありのままの自分でられる。すごく居心地がいい。

そこへ丸山がやってきた。扉を開けるなり月館の姿を見て「おや」という表情を作る。

「月館先生、珍しいですね」

鈴は名前を呼ばれた月館の顔が強張るのを見た。「ええ」とだけ言っ言葉濁す。

「たまたまお隣にいらしたんで私の絵の評価をしてもらってるんです。丸山先生みたいに玄人じゃなく、素人の意見も参考にしないと」
咄嗟に出た言葉だが嘘ではない。丸山は「そうか」と疑うことなく「どうですか、宮野の絵は」と意地悪く笑みを浮かべて月館に問いた。

「僕は、本当に素人意見ですが、いいと思います」

さっきよりも表情が柔らかくなった月館は、恐縮するように小さく笑った。

「俺はもつとデッサンをやれって言ってるんですけどねえ。基本がなっちゃいけないから」

「デッサンは嫌い。見たままを描かなくちゃいけないなんてナンセンスよ」

「とまあ本人はこんな調子なんですよね。基本を固めれば、もともと頭はいいんだから国立の芸大なんてすぐ入れるのに」

ため息を洩らす丸山を、ちらりと横目で見てから鈴は頬を膨らませた。

「絵は趣味で描きたいんです。趣味の範囲で上手くなりたいたいんです」

「夏の展覧会には出すんだろ」

「出しますよ」

「展覧会があるんですか」意外そうに月館は訊いた。

「ええ、まずは都内の展覧会があつて、そこで優秀賞とれれば全国

高校展覧会に出展できるんです。まあ野球でいうところの甲子園みたいなものですね」

「なかなか大きな展覧会なんですね」

「そうですね。そこには全国の高校美術部から精鋭たちが集まってくるんです。だから俺としては宮野に期待してるんですね。たった一人しかいない美術部から優秀賞でたら面白いじゃないですか」

「はあ」

「面白くないです。どいてください」

月館と丸山を押しつけて、戸棚から絵筆と絵の具を取り出す。アルミの筆洗器がテーブルに置かれると、石油に似た臭いが部屋に充満した。

「これから作業に入りますので、先生方はどうぞお戻りください」
キャンバスの前に座り、さっそくパレットで新しい色を作る。

このままここに居ても邪魔になると思った月館は自室へ帰ろうと踵を返したが、後ろから肩を叩かれ

「コーヒーでも飲んでいきませんか」と丸山に誘われた。

断る理由が思いつかなかったのか、月館は「では、少しだけ……」
と言って丸山とともに準備室へ入っていった。

二人の教師を肩越しに見送って、鈴はペイントナイフで深い青をキャンバスに刻みこんでいく。

鈴は筆よりもナイフを好んで使用した。キャンバスの上で色を重ね、削りながら下地の色と混ぜてゆく。ルフラン製のメデムを混ぜ込んで質感と透明感を出し、より水中に潜っている雰囲気を出していく。

手ではこれらの作業をしつつ、頭では準備室に消えた二人のことを考えた。

月館先生は私と一緒にいるところを他人に知られたくないはずなのに、悪いことしてしまったな。本当は一秒でも早く自分の部屋に戻りたいはずなのに……

図々しい性格の丸山と何を話しているのか気になるが、聞き耳を

立てる趣味はない。できるだけ気にしないようにキャンバスに集中したが、やはり思うようにはかどらなかつた。

4

外ではまだ、しつこく雨が降っている。月館は傘をささずに車まで走って乗り込んだ。ハンカチで身体についた水滴を軽く払って、エンジンをかける。

駐車場から正面玄関へ車を流したところで停車させた。先に帰つたはずの鈴が雨が止むか観察しているように、空を眺めて玄関に立っている。月館の車に気づいた彼女は、笑ってから頭を下げた。

月館は、少し迷ってからサイドブレーキに手をやり、窓を開けて助手席に乗るように指示した。鈴は断ることなく、嬉しそうに乗り込む。

「子猫を押し付けた礼だ。駅まで送って行く」

と月館が言つと、鈴は「今さらですか？」と笑つた。

「機会がないと、礼ができない性分だな」

「では、お言葉に甘えて」

車をゆっくりと発進させる。いつも以上に気を使ってハンドルを握っているせいか、手が汗ばむのを感じた。

しばらく大通りを走らせていると、鈴が「お腹空きませんか」と問いかけてきた。時計を見ると六時に差しかかるうとしている。

「しかし、ご両親が心配するだろう」

「うちのことは心配いりません。むしろ、ご自分のことを心配したほうがいいですよ。生徒と食事なんて知り合いに見られたら厄介ですから」

「そつれはそうかもしれんが」

月館は、内心を見破られてドキリとした。制服姿の鈴と店に入るなど出来るわけがない。そんな考えをしながら建前を言ってしまった自分を恥じた。

この子の前で、大人の狡さを見せたくない。きつと、良い大人ぶった大人たちを見てきては、たくさん失望してきたはずだ。

ふと、先ほど美術準備室での丸山の話思い出した。

「宮野のこと、どう見えます」

突然の問いに、月館が返答に困っていると

「この学校で一番注意すべき生徒ですよ。平気で色んなものを見捨ててしまう」と丸山は言った。

駅に通ずる道より手前で左折を指示した鈴は、鞆から携帯電話を出して何かを確認した。

「大丈夫ですよ。この先にある店は隠れ家的なお店なんで、学校の人たちは知りません」

道はだんだんと狭くなり、緩やかな坂が続いた。景色は都会の喧騒から閑静な住宅街へと移り変わる。どちらからかと言えば高級住宅街の集まりのようで、静かすぎる道に響くエンジン音が気になった。入ってはいけない場所に来ている気分だ。

「ここですよ」と鈴の指した建物は、一見すると店に見えない。駐車場らしき中庭も車が二台ほどしか停められそうにない。

車から降りた月館は傘をさして助手席に向かった。鈴は雨に濡れないように傘に入ろうと、月館に身体を寄せてくる。できるだけ意識しないで雨露の垂れる若い楠と栗の木の間を歩いた。左側には青色に咲く紫陽花が咲いている。

洋館の古びた木製の扉を開けるとカランカランと乾いたベルの音がした。奥から顔なじみらしきシェフが現れる。

「やあ、いらっしやい。ちょうどよかった。今日は新作料理ができたんだ」

「それは良いタイミングだわ」

「お客さんもぜひ食べてってください。どうぞどうぞ」

薄暗い廊下を進み、奥の部屋へ案内される。狭い廊下とは違い、舞踏会でも開けそうな広さがあり、ポツポツと骨董品であるうテーブルと椅子が並んでいる。鈴と月舘は窓側の席へ座った。

室内に明かりはほとんどない。テーブルの上に飾られた花の隣にランタン。壁に掛けられた淡い間接照明のみだ。それ故に、雨だというのに窓から見下ろす街明かりが映えて綺麗だった。

「ここには、よく来るのかい」

場所といい、雰囲気といい、高校生が気軽に来れる店ではない。料理も相当値段が張りそうだ。

「週に一回程度かな。今日みたいに店が休みの日しか来ないんです」

「さっきの人は」

「父の元恋人」

「え」

「あ、違った。元父の元恋人。今は私の友人」

食前酒の代わりに葡萄ジュースが運ばれてくる。一人しかいないのか、先ほどの案内してくれたシェフだった。どこからどう見ても人の良さそうな中年の男性にしか見えない。

「先生、さつき、私のご両親のこと心配なさってたけど杞憂よ。駅の近くのマンションに一人で住んでいるんですから」

「ご両親は離婚されたのか」

「うん、去年ね。どっちに着いて行くのかって聞かれたから、どっちも嫌だつて言ったんです。おかげで二人から仕送り貰えるから意外と裕福な暮らしをさせてもらっています。うちの元親は二人ともお金持ってるのよ」

「学校には言っていないのか」

「言っただって何もしてくれないでしょ」

そうかもしれない、生徒の私生活より成績と素行を重要視する。それが学校というものだ。月舘がそう言うと鈴は「先生って先生らしいけど似つかわしくないわね」と笑った。不思議なことに、月舘

はその言葉が嬉しかった。

「子猫を押しつけて悪かったな。管理人は何も言わないか」

「ペット飼えるマンションなの。あの仔、良い仔だわ。全く粗相しないし、爪とき用以外のところは引っ掻いたりしないんです。玩具で遊ぶ時も静かに遊ぶから、張り合いがないくらい」

「名前は何だったかな」

「アポロ13」

「確か三毛猫だったような」

「そうよ」

「いつもは何て呼んでるんだ」

「アポロ13」

「そうか」

「そうよ」

部屋の隅に置かれた蓄音器から、ノイズの混じったピアノ曲が流れてきた。鈴は「サティだわ」と言った。月舘は、その曲をどこかで聞いたことあるものだったが、作曲者の名前を今初めて知った。ほどなくして運ばれてきた料理はどれも秀逸としか言いようのないものばかりだった。

ハーブサラダのオニオンドレッシングサラダ、

ほうれん草のコンソメスープ、

合鴨のフォアグラムース、

白身魚の香草焼き、

ふわふわのパン、

そして、オレンジのシャーベットケーキ。

月舘にとって、どれも数年ぶりに味わうものだ。明日からインスタント食品を食べられるかという不安がよぎる。

「ねえ、先生。ここのお代は私が持つわ。だからお礼してくださいね」

食後の葡萄ジュースを飲みながら、鈴は無邪気な笑みを浮かべた。
「なんだ」

「先生のお宅へお邪魔したいです」

「考えておく」

「すぐに断らないのは、前向きに捉えていいですか」

月館はグラスの中身を一気に飲み干した。冷汗が背中をつたる。

「来ても何もないぞ」

「たくさん本がありそう。手に入りにくいものばかり。楽しみですよ」

「言ってくれば持ってくる」

「あら、そんなたくさん本の本のリストを作ってくださいさるんですか」

惨事になりつつある家の本の山を思い浮かべて、月館は諦めの息を吐いた。

「休日なら、いつでも来い」

嬉しそうに笑う鈴の顔を見て、グラスの中身が酒ならばと、月館は思った。

5

だが、次の休日になっても鈴は月館の家に行くことはなかった。

梅雨も明け、蒼の中を白い雲が流れている。その様子をベッドの上で窓越しに見ている。眺めているわけではない。流れてきては次々に変化してゆく雲を、ただ目で追っているだけだ。そこに何も感情がない。

出来心であんな提案をしたわけではない。行く決心がつかないのだ。月館の所有する本に興味もあるが、それ以上に月館本人のことが知りたいという欲求が面映ゆい。頬を赤らめて月館の部屋には入りたくはなかった。そういう俗物的な気持ちを彼に対して持ちたくなかったのだ。

三毛猫が傍らで寝ている。寝ている、というよりも毛玉が膨らんでは萎むという運動を繰り返しているようだ。拾って来た時はカツ

プに入るぐらいの大きさで、脇の下に挟むように寝かしつけていた。それも子猫は親猫の体温で安心して眠ると聞いたからだ。その癖がついてしまい、成猫となった今でも脇に挟まって眠る。

毛玉を撫で、鈴は月館のことを考えた。

大人に失望を抱いている。しかし、すべての大人に対してではない。子供が触れる大人の範囲は狭い。両親が親戚、その知り合い、そして学校教諭。限られたキャストイングの中から、結論づけるのは間違っていることを鈴はわかっている。

その限られた中からでも、必要としてみたい大人を見つけたかった。

それが月館だった。

教師であって、教師になりえない教師。いつまでも諦められない、しかし叶えさせる勇気もなく、夢にしがみついている大人。自分にも他人にも興味がない男。何のために生きているか、迷える人間。

たぶん、あの人の命を繋ぎ止めているのは、遠い異国の地中に眠る、古代の記憶だけ。それもかろうじて　　鈴は目を閉じる。

瞼の奥に、砂と汗にまみれて土を掘る月館の後ろ姿が映し出される。

伝説の都市トロイアを発掘したシュリーマンのように、あの情熱を月館が再び手に入れられたなら。その姿を見られたなら、とても幸せだと鈴は思った。

なぜか、月館のことを考えていると身体中の神経が騒ぎ立つ。じっとしていられなくなり、ベッドから出た。急に飛び起きた主人に驚いた猫は、目を大きく開いて見ている。

絵が描きたくなかった。しかし、必要最低限のものしかない部屋に画材はない。鈴は制服に着替え、殺風景な部屋から飛び出して学校へ向かった。

アスファルトに陽炎が踊っている。夏は嫌いではないが、熱されたアスファルトから立ちこめる石油臭さで不快感が増す。途中の自動販売機でお茶を買った。

運動場のほうからランニングをしている掛声が聴こえてくる。屋上のプールでは水泳部が夏の都大会に向けて練習をしているのだろう。水着姿の女子が、フェンス越しに見下ろしていた。鈴は少し、羨ましく思う。

昼を過ぎてからの美術室は日陰になっている。外よりはマシだろうと、期待を込めて扉を開いた。

「やあ」と中から声がした。丸山以外に休日には人がいるとは思っておらず、鈴は驚いたまま扉の前で立ち止まっていた。

「中においでよ。ここ、涼しいよ」と声の主は手招きするので、鈴は扉を閉めた。

「あなた、三国くん？」

名前を呼ばれて、三国は微笑む。

「そうそう、よく名前覚えてくれてたね」

「だってクラスメイトじゃない」

「そうだけど、宮野さんってクラスメイトとか眼中にない感じだし」

「そんなことないわよ」

「そう？」

三国は持っていたペイティングナイフを置き、鈴に右手を差し出した。手首の銀のブレスレットが光る。

「改めてよろしく。ちょっと前から美術部員になりました三国孝博です」

鈴は差し出された右手を受け取る。

「全然知らなかった。私、ほとんど放課後は来てるのよ」

「平日はバイトで忙しいからなあ俺。本当は今日が初めて。だからほら」

三国が描いていたキャンパスには、赤と黄色のまだら模様が浮かんでいる。

「これ、下地？」

「うん、下地塗ってからモチーフを決めるんだ」

「今回のモチーフが決まったの」

「そうだなあ。たくさんフルーツ描きたいな。その辺にぐるぐる転がってるの」

「いいわね、買いに行こうよ。駅前の商店街にフルーツパーラーがあるのよ」

「いいの、あそこ高そうだよ」

「部員が一人増えたなら、部費も増えるでしょ」

「それもそうか」

二人は部室を後にし、駅前の商店街へ向かった。途中、蝉の聲が止むことなく頭上から降り注ぎ、三国は暑さのあまりに自動販売機で炭酸水を買って飲んだ。頬に赤い塗料が薄くついている。

三国はクラスでは普通のタイプの人間だ。この学校でいうところの「普通」、つまりは目立たないぐらいに髪を茶色に染め、白いワイシャツの中に赤いTシャツを着るような学生だった。授業中はたいてい寝ているか、漫画を読んでいるかのどちらかで、その点では鈴と同じものがあつた（鈴の場合は漫画ではなく小説ではある）。

フルーツパーラーで赤い林檎を四つ、青い林檎を三つ、オレンジを五つ、イチゴを一パック買った。領収書を貰ってからフルーツミックスジュースを二人で飲み、部室へ戻った。

鈴は準備室から白い布と籐の籠を持ってきて、机の上にセッティングを始める。

「細かいところは任せるわ」

「うん、ありがとう」

洗ったイチゴをかじっていた三国は、鈴が置いた布をほとんどいじらずに、その上にオレンジと林檎を置き始めた。赤と青の色を様々に動かしては、少し離れ、遠くから観察する。

「手慣れたのね」

「親父がさ、画家なんだよね。だからよく描かされてた」

「なるほど」

構成が決まったのか、今度はペインティングナイフを左手に持ってキャンパスを睨んでいる。下地にメデイウム液を混ぜていたせい

か半分乾きかけている表面を削るように、モチーフの輪郭を捉えていった。鈴はイチゴを食べながら、三国の描く様子を眺めている。自分の創作意欲はどこかへ消えたらしい。

「左利きだ、いいわね。左利きっていうだけで何か特別な感じがするわ」

三国はちらつと振り向いて笑った。

「特別、そうかもね。生活しにくいという点では」

「ああ、ハサミとか」

「うん、左手使うと右脳が刺激されて良い絵が描けるとか言って、親父が無理やり左利きにしたんだ」

「文科系、星一徹だ」

「でも、俺、強制されるのが嫌でさ。美術専門の高校を蹴ってわざとここに来たんだよね。一年の時は一切筆を握らないでフラフラして、遊びまくって」

「でも、好きだったんだ」

「そうなんだよなあ。絶対に描くかって思ってただけど、この前この前通ったら筆洗液の臭いが懐かしくなって描きたくなった。

でも家で描くのは癩に障るから、学校で描こうと思ったんだ」

キャンパスの上で色を重ね、新しい色を作り、ナイフを巧みに扱って不必要なところは削っていく。また数分しか経っていないはずなのに、林檎やオレンジと認識できる。命はこれから吹き込むのだろう。

鈴は自分の描き方を思い出して息を吐いた。

「あなたの描き方を見ると、私ってあんまり描くことは好きじゃないんだって気づいたわ」

「どうして」

「三国くんは本当に描くことが好きなんですもの」

「好きだよ、宮野さんくらい」

「私は絵に対してそんなに情熱を持ってないわ」

「ちがうよ、俺は宮野さんのこと好きだって言ったの」

三国はちらつと振り向いて、笑った。
よく笑う人だなと思つて、鈴も微笑んで「ありがとう」と言った。

6

三日間、鈴は社会科教諭室へ現れなかった。月館はイギリスから届いたばかりの史書を読みながら、ずっと聞き耳を立てている。聞こえてくるのは運動部の掛声、エアコンの音、蝉の声。

一日目は、期末テストを控えて忙しいのだろうと考えた。

二日目は、体調を崩しているのだろうかと不安になった。

今日は、職員室で鈴の担任の出席簿を盗み見て、三日も欠席していることを知り心配になった。

ふと、本のページは進んでいるのに内容が全く頭に入っていないことに気がつく。最初から読み直そうとするが、一向に英文が理解できていない。月館は本を閉じて鞆に閉まった。

腕時計を見ると、五時になろうとしていた。二杯目のコーヒーを飲むか悩んで、コップを洗ってから教諭室を出る。

車に乗ってから、再び悩む。

鈴が住むマンションへ行ってみるか。何をしに行くのか。独り暮らしだと知っているのは自分だけだという言い訳もある。

車を走らせる。大通りを外れて住宅街へと移動した。確か金曜日が定休日だったはずだ。

この前と同じ場所に車を停車させた。すでに茶色く色褪せた紫陽花の横を通り、扉を開ける。乾いたベルの音がして、この前と同じように奥から男の声が聞こえた。男は月館の顔を見るなり「ああ、この間の鈴ちゃんといらっしゃったお客さん」と頭を下げた。月館も同じように頭を下げる。

「今日はお一人ですか」

シェフは月館の後ろを探すようなしぐさをする。

「ええ、はい。実は宮野が三日ほど学校を休んでおりまして、何かご存知でないかと思ひまして」

「三日も」

「はい」

シエフは少し考える素振りをしてから「風邪でも引いたんでしよう。この時期になると決まって寝込むんです」と答えた。

「お客さん、鈴ちゃんの様子を見てきてもらえますか」

「私が……ですか」

「鈴ちゃんからお話はよく伺っております。とてもお世話になっている先生だと」

シエフは月館を中へ案内し、身近なテーブルへ座らせた。

「こちらで少々お待ちください。今、鈴ちゃんに渡すご飯を作りますから」

ワイングラスに浸された葡萄ジュースを少し飲んで、月館はぼんやりと外を眺めた。夏の陽はまだ沈んではおらず、辺りを紅に染め上げている。突然に、家を訪ねて鈴は驚かないだろうかと考えた。

数分し、シエフが紙袋を提げて現れた。月館に渡す前にテーブルに置き、自分も椅子に腰を掛ける。そして、じつと月館を見つめた。

「あの、何か……」

シエフは自分の耳の付け根を、指で突つつくように指した。

「首、吊りましたね」

「え」

思わず、耳の付け根に手をやる。

「……どうして」

「僕もね、ほら、ここ」

顔を斜めに動かしたシエフ耳元に、薄く痣が残っている。

「どうしてもね、残ってしまうんですよ。僕も自分ではわからなくて、鈴ちゃんに言われて気がついたんです。ああ、でも普通の人が見てもわかりませんから、ご安心ください」

「宮野は何の痕なのか知っていますのですか」

「知ってます。目の前で吊りましたから」

月館は「それは、いつ頃」と尋ねた。

「彼女が小学六年生の時です。当時、僕は彼女の父親と付き合っていました、振られた腹いせに恋人の家で死んでやるうと忍びこんで和室の鴨居にロープを引つ掛けて首を吊ったんです。けれど、ロープが体重を支えきれずに切れちゃったんです。馬鹿みたいな話ですよ」

シエフは面白そうに笑う。

「ちょうどその時、鈴ちゃんが帰って来たんです。帰ってきて僕を見たときの第一声わかりますか」

月館は「いいえ」と首を横に振った。

「僕の顔を見て「あなた、ご飯作れる？」って訊いて来たんです。僕は反射的に「うん」て答えました。もうその頃は一人前にホテルで料理を作っていましたから腕に自信がありました。それに、両親ともに帰りが遅いって知っていましたから、何か美味しいものを作ってあげようと思ひまして、悩んだ挙句にオムライスを作ってあげました」

「宮野は食べましたか」

「ええ。残さずに全部。食べ終わってから、彼女、こう言っんです」

死ぬのなら、まず私を殺してくれないかしら

「命に所有欲が湧かないとか、難しいことを言うんですよ。六年生の女の子が。なんだか僕は非常に悲しくなりましたね。だから、死んだらおじさんの美味しいご飯が食べられなくなっちゃうよって言ったら、また作ってくれるのかって。僕はもう死ねなくなっちゃいました」

「彼女が死にたいと言っただんですか」

「死にたいとは言っけません。殺してくれと言っただんです。でも本当のところはわかりません。もしかしたら、僕を死なせないために言っただけかもしれませんし」

「そうですか」

「あなたもそうでしょう」

唐突な言葉に、月館は戸惑った。

「私ですか」

「もう死ねないでしょう」

そう言えば、いつから「死」に対して羨望を忘れてしまったのだろうと思いついてみた。首を吊つたのは三年前。それから死にたくとも周りが死なせてくれなかった。鈴の言う「命への所有欲」がなく、生きたいと願っていないのに生かされ続けていた。

鈴が現れてからもその気持ちは強く残っていて、彼女のような物が好きが自分の生活圏内へ入ってくるのが煩わしいと感じたこともある。

だが、今はどうだろう。違う。

明日、彼女はどんな風に話しかけてくるのだろう。どんな風に笑うのだろう。いつしか月館は明日になることを楽しみになっていた。そして過ぎゆく日々を懐かしむこともあった。

自分の中に湧き上がる感情を理解しないまま、ただ、鈴に会えるのを待ち望んでいるのだ。

「私が死んだら、どうなりますか」

月館の問いに、シエフは哀しげな表情をした。

「彼女も死ぬでしょう。肉体的にはなく精神的にです。何もかもに絶望して。あなたたちはお互いに気づかないままギリギリのところを支えあっているように僕は見えます」

そして「とても羨ましいことです」と重ねた。

それから月館は少しだけ会話をして、車に戻った。助手席に置いた紙袋から食べ物の匂いがした。

ルームミラーで耳の付け根のあたりを覗きこんでみる。たしかによく見ると一部だけ他よりも色が濃くなっている皮膚がある。触ってみたが、違和感はない。

鈴はきつと気づいている。命を捨てようとしていた教師に、何故彼女は興味が湧いたのだろうか。何故、あんなにも毎日のように会

いに来てくれたのだろうか。

月館はこのとき初めて、宮野鈴という少女の心を認識し、深く理解したいという欲望に駆られたのだった。

7

振動音で鈴は目が覚めた。枕元においてある携帯電話を覗くと、三国からメールが届いていた。「大丈夫、元気です」とだけ返して、再び目を閉じた。

熱はだいぶ引いたはずだが、昨夜から何も食べていないせいか身体の倦怠感が抜けていない。アポロ13にご飯を与え、自分にも栄養を与え、それから着替えて と、これからの計画は立てるものの、立ちあがる気力が湧かなかつた。なので、鳴らされたインターホンも聴こえないふりをした。

やや間が合ってから二回目か鳴らされる。ぎこちない雰囲気か、いつもの勧誘関係の客ではないようだ。

鈴は起き上がって、受話器を取った。

「はい」

「月館だ」

受話器の向こうから聴きなれた声がして、鈴は少々慌てた。上手く頭が回らず、どうしようかと悩んでいると月館が遠慮がちに「例のレストランのシェフからご飯を預かっている。それだけでも渡したいのだが」と言った。

「わかりました、どうぞ」

正面玄関のオートロックを解除すると同時に受話器を置く。折りたたみ式のテーブルの上に置かれた鏡で、顔を覗いた。酷い顔だ。洗面所で顔を洗ってから、Tシャツの上から黒のカーディガンを羽織った。再びインターホンが鳴らされる。

ドアの向こうでは、月館が紙袋を差し出したままの恰好で立っていた。あまり鈴の方を見ないようにしているようだ。彼なりに気を遣っているのだろうと鈴は思った。

「先生も食べていきませんか」

鈴は受け取った紙袋を覗く。

「いや、遠慮しておくよ。体調が悪いのだろう」

「病人に食事の支度させるんですか。それに、これ二人分ありますよ」

半ば無理やりうながされた月館は、躊躇しながらも鈴の部屋に足を踏み入れた。鈴は月館からグレーの上着を剥ぎ取り、壁にかけた。上等なものはずなのに、全く手入れされていないせいか上着はよれている。相変わらず衣服に無頓着になるほど遺跡の写真を見ているのかと想像すると、鈴は微笑ましくなった。

「先生はご飯を温めて用意してください。台所のものは適当に使って来ていいです。その間にシャワー浴びてきますから」

月館の返事を見届けてから、鈴はシャワーを浴びた。熱は下がっているし、何よりも一昨日からの汗を流したい。手早く身体を洗ってから、新しいＴシャツとカーゴパンツに着替えた。髪を乾かしてから部屋に戻ると、テーブルの上に食事が並べられていた。傍でアポロ13が鶏のささ身食べている。鈴の視線に気づいた月館は「シェフが猫用に作ってくれたんだ」と言った。

オレンジ色の座布団を月館に譲り、自分はベッドから枕を取った。月館の紙製の弁当箱には鶏南蛮とポテトサラダ、ひじきと豆の煮物、沢庵が入っているのに対し、鈴は野菜がたっぷり混ざったチーズリゾットだった。明らかに、月館用と鈴用の弁当を分けていることから、シェフは無言で「二人で食べなさい」とアドバイスしているようだ。

「レストランへ行かない時は、自炊しているのか」

「麦茶をコップに注ぎながら、月館は訊ねた。」

「そうですよ。調理器具はいろいろ揃ってたでしょ。夜は勉強の他

にやることないから、料理に時間をかけられるんです」

「そう言えば、あつさりとした部屋だな」

テレビも大きな家具もない。ベッドの横の三段カラーボックスに本が入っている。テーブルの下にはノートパソコン、衣服や雑貨などは全部クローゼットに仕舞われている。

「音楽もパソコンで聴きますから、まずCDはいらないですよ。テレビも観ませんし、ニュースはネットで足りてるので」

「僕の部屋も似たようなものだ。ただし、ここより数百倍も本で混沌としている」

「先生の本は貴重な資料書が多いでしょ。私は小説が多いから、読み終わってしまえば売っています。もしくは図書室で借りますからかさばらないんです」

「宮野を見習って、少し片付けるかな」

「私は手伝いませんよ。本って自分で整理整頓するものだと思っますから」

「それはそうだ」

リゾットを口に運ぶ。野菜の甘みとチーズの香りが舌の上で広がった。味覚が落ちている時でも、シェフの作った料理は美味しいとわかる。身体に優しい栄養が行きわたり、倦怠感が薄れてゆく。

食後は薬を飲んで、布団に潜った。頭だけひよこりと出して、片付けをする月舘の背中を眺める。手慣れた様子で食器を洗い、ゴミをまとめていく。長く独りで暮らしていたことが窺える。ついでにアポロ13のトイレ掃除もしてくれていた。

「恋人はいたの」という質問を、迷った末に飲み込んだ。とてもくだらないと思ったからだ。鈴が知りたいことは、もっと他にある。

どうして今まで生きてこられたのか

しかし、その質問もまた、心中で問いかけるだけで留まってしまう。

もし、彼がこの世で生きる糧を見つけているのなら、できることなら共有したいとも願っている。そうすれば青春にありがちな一過

性の情熱ではなく、不変的な気持ちと確信できるはずだと信じていた。

では、共有できなければどうなるのだろうか。やはり、他の大人とは違うと興味本位だけで近づいたと決めるのか。否、自分の本音の在り所を、ずっと探し続けるはずだ。それが怖い。

「……月舘先生」

鈴は、帰り支度をする月舘を呼びとめた。月舘は一度手に持った上着を、再び壁にかけてベッドに近寄る。

「どうした、どこか痛むのか」

首を横に振って、上半身を起こす。手伝おうと伸ばした月舘の手を、そっと握った。初めて触る月舘の手は、表面が硬くて、温かい。「私、先生の好きよ。ううん、声も好き。一番最初に声を好きになったの。先生の授業を受けている人たちを羨ましく思ったわ。こんな感情、先生にとっては煩わしいだけかもしれないけれど」

「煩わしくなんかないさ。とても嬉しく思う。しかし」

月舘の言葉が詰まる。うつむき、どこか痛みを堪えるような苦渋の面を作り出している。

「君に知識以外のものを与えてやれる自信はない」

「そんなもの、与えようと思って与えられるものじゃないわ」

「僕は……君が望むような立派な大人ではない。きつと、君を失望させてしまう」

「違う、違うのよ先生。怖いのはあなただけじゃない。私だってこんなこと言いたくなかったし、こんな感情をあなたに持ちたくなかった。教師と生徒の関係のまま、いずれ別れがやってきて、私は他の誰かと時を過ごしながら時々あなたのことを思い出す。それだけで良かったはずなのに……ダメね人って。どんなに誤魔化しても心は勝手に動いてしまうもの」

「宮野……」

「いいの、先生。今は何も言わないで。私も自分に自信がないの。時間が欲しいんです。だからもう少しだけ、このままでいさせてく

ださい、もう少しだけ私に知識とそれ以上のものを分けてください」
強張っていた顔がゆるみ、月館は小さく二回、頷いた。

「君が望むなら、かまわない」

「ありがとう、先生」

鈴はそつと月館の頬を持ち、顔を近づけた。口の端に軽く唇で触れる。

「まだ、本当のキスをするまでの勇気がないから」

布団に潜って目を閉じた。まともに顔を見れやしない。

月館は鞆から取り出したメモ用紙に何かを書き止め、一枚めくって鈴の手に握らせた。

「何かあつたら連絡してほしい。今日みたいに体調が悪い時でも、独りに飽きた時でもいい」

頭を出して頷いた。月館は優しく笑って頭を撫で、それから静かに部屋を出て行った。

鈴はメモ用紙に書かれた数字を何度も読み返し、大きく溜息を吐いた。迷い事を言ってしまったと後悔する。月館が部屋に訪れたことで舞いあがってしまったのかもしれない。

「何を焦っているのかしら、私」

明日からテスト期間だ。期間中は教職員室への入室が禁止されているため、月館の元へ訪れることができない。テストが終われば夏休みへと移る。行動を起こさなければ、何事もなかったかのように夏休みは過ぎ、二学期に何食わぬ顔で月館に会えるだろう。このまま頭を冷やすべきか、それとも夏休みに彼に会いに行くべきか。

自問自答しながら、鈴は小さく笑った。不思議だ、小さなころから自問自答するときは決まって答えが出ていうというのに。

期末テストの最終日、月館は鈴の姿を教室で見掛け安堵した。どうやら体調も良くなりテストは全て無事に受けられたらしい。

鈴のクラスの試験官をしているとき、彼女は月館のほうには目もくれずに試験用紙に集中していた。彼女らしい、と思う一方で自分は気にしないようにしているつもりで無意識に彼女の姿を瞳に映していることに情けなさを感じた。

自宅に戻り、いつもの封筒を触る儀式を済ましてから上着も脱がずにベッドに横になった。目の前にあるのは染みの目立つ天井ではなく、少し頬を赤らめた鈴の姿だった。あの日の鈴の言葉はほとんど告白に近い。学校でも優秀と謳われ、少女にしては大人びており、それでいて可憐な容姿を持つ女性に好意を持たれることは男ならば嬉しい。自信さえ持つかもしれない。しかし月館の場合、湧き上がったのは一抹の不安だった。彼女の情愛はまるで自分を闇の中から救いだそうとしてくれているようだったが、その手を握ってはいけないとも確信している。教師云々の前に、自分には彼女の手を握り返す資格がない。自分は彼女が望む理想の大人とは程遠い人物なのだ。

そつと頬と唇の境を指でなぞる。そこにはまだ、鈴の温かさが仄かに残存していた。

扉の叩く音がした。平日の夕方の訪問者など宅配便か新聞の勧誘だ。身体を動かすことが面倒だったが二回目のノックで玄関へ向かった。覗き穴から外の様子を観ると、見知った顔がそこに居た。すぐさま扉を開ける。

「先生……」

来客は困った顔をしながらはにかんだ。

月館は要件を聞く前に来客を部屋に通す。足の踏み場もない惨事の部屋に、少し悩んでベッドに座るように促した。それから救急箱を取り出して、来客の隣へ座る。

「今回は酷くやられたな、飯島」

飯島と呼ばれた少年は、消毒液が染みたのか顔をしかめた。右目が腫れ、口元が切れて血が固まりかけている。他にも長袖のシャツから覗く肌にはいくつかの痣が見え隠れした。

「うん、薬がなくなっただから……」

「もうないのか」

チラリとカレンダーを確認した。新緑の葉が煌めいている写真の下に赤い丸がいくつか付けられている。初夏に入ってから間隔が狭まってきていた。

「うち、クーラーないから、親父、それでイライラして、せつかく減ってきてたのに」

飯島は治療しようとする月館の腕を避けて、胸の中へ飛び込んだ。小さく震える肩を月館はそっと抱く。十分な栄養を摂っていないのか随分と痩せこけていた。

「先生、ごめん。せつかく先生がここまで協力してくれたのに、俺、もうダメかもしんない」

ここまでか、月館は小さく溜息を吐いた。そして次に掛けるべき言葉を探す。

「飯島はよくやったよ。限界はもうあの時にきていたはずなんだ。

それでも、君はお父さんのために頑張った」

「でも、もし、俺が警察に言ったら、先生だってどうなるかわかんないじゃん」

「僕は……」

僕はどうなってもいい、と言おうとして言葉が詰まった。この計画が立ち上がった頃から覚悟していた言葉のはずだったのだが、月館は吐くことができない。

少女の笑顔が目の前をチラついて、頭を振って消し去る。

恐ろしいのか私は、今更未練がましく、ここに居たいと思っっている。月館は自分の手が震えていることに気がついて憤りを覚えた。

飯島はかつて月館の教え子であった。月日は一年ほど前に遡る。

飯島は毎日のように体中に痣を作って教室へ現れていた。月館はも

ちろん他の教師たちも飯島の身に何が起こっているかは一目了然であったが、学校の方針としては生徒に深く関わらないこととなっていたので何も対策はなされなかった。そして飯島はついに姿を現さなくなったしまった。

ここで月館は選択を迫られた。学校という組織の一つとして彼を見放すか。それとも、人として彼を救うべきか。

首を吊ってから二年が経っていた。介護をしていた母親も死に、駆け落ち同然で結婚した両親に親戚もいない。月館は身も心も孤独だった。もし彼に関わったことによって問題が生じて自分も失うものなどない。なら、せめて教師らしいことをしてやろうかと彼の家を訪れた。

安っぽい朽ちかけたアパートの一室、ノックと共に顔を出した飯島の顔には生気がなかった。それどころか痣がますます酷くなっている。飯島は一瞬嬉しそうな表情を見せたが、すぐに顔を強ばらせ月館をアパートから引き離し近くの公園へと移った。

そこで飯島は母親は家を出、父親はドラックに溺れていることを打ち明けた。身体の痣はドラックを買って来いとせがむ度に父親が暴れるからだという。

ドラックを辞めさせるために更生施設なども検討したほうが良いと助言してみたが、飯島は強く拒否した。今となっては唯一の肉親となってしまうた父親を失いたくない一心で誰にも言わなかったのだと。

「あんなんだけど、昔は誕生日に俺の好きなゲームとか探して買ってきてくれたりする優しい親父だった。警察に捕まる前に、俺が辞めさせてやりてえんだ」

月館は、傷つき倒れそうな教え子に「やめろ」とも「頑張れ」とも言えなかった。様子を見る限りでは、素人の手に余る。本当に父親からドラックを遠ざけるためには然るべき場所へと相談したほうが良いに決まっている。そんなことは月館にも容易に想像はついた。しかし、もしかしたら、ひよっとすると、息子の献身的な思いが父

親に届くかもしれない。泣きながら「警察にだけは言わないで」と懇願する飯島をなだめながら、月館は小さな希望を信じたくなったのだ。

「飯島、家にある薬を全部持っておいで」

「先生？」

「僕にも協力させてくれ」

飯島は涙を拭って頷き、家からドラッグを持って来た。一見は高級な紅茶の葉が入っている缶だが、中には透明な袋に小分けされた白い粉が入っていた。

「これで全部か？」

「うん、なくなったら買いに行くんだけど、売人もすぐに会えるわけじゃないし、金もかかるし簡単には手に入らないんだ」

飯島家の収入は生活保護と、ときどきのバイトだけで何とか毎日を送っている。そう安々と高価な薬を変える余裕はない。

「なら、この薬は私が預かっておく。なくなったら取りにこればいい。そうして少しずつ間隔を空けていけばいい」

「うん、でもそれが無くなったら？」

「できるなら、無くなる前に決着をつけたいな」

飯島は月館の顔を凝視すると、膝の上の拳を握りしめた。

「飯島、これからもつきつくなるぞ。素人だけで薬物依存患者を更生させるのは至難の業だ。本当なら薬が抜けきるまで監禁しないといけないが、私にはそれはできない」

「うん、俺、頑張るよ。絶対に薬を辞めさせてやる」

しかし彼の決意とは裏腹に、薬は半年で底を尽きた。月館は金のない飯島の代わりに売人に会いに行った。

小雨の降る日、腐った生魚のような異臭を放つ路地裏で取引をした。思ったより簡単に薬は手に入った。自宅に戻ると、茶封筒に入れて書類棚の一番下に収めた。

月館はドラッグに手を出すのは、生きたいという欲がまだ残っているからなのだと思う。現実の辛さから目を背けてでも生きたい

という、強い欲望。自分が薬を欲しないのは生よりも死に憧れを抱いているせいだろうと考えた。

飯島は飯館の腕の中でひとしきり泣いた後、黙って治療を受けた。涙と共に心のわだかまりも吐き出したせい、飯島の表情はさつきよりも和らいでいた。

「先生……」

「なんだ」

「ごめん、俺、弱音吐いちゃって」

「弱音も吐きたくなるだろう。僕の前でいいなら吐くだけ吐いていけばいい」

飯島は小さく頷く。

「俺、もうちょっと頑張ってみるよ。先生にも迷惑かけっぱなしだけど」

「僕のことは気にしないでいい」

月館を元気づけようと少年は弱々しくも笑った。

その先に彼女の笑顔があった。

9

アポロ13の鳴き声で鈴は目が覚めた。冷房をつけっぱなしで寝てしまったせい、か気怠い。甘えて鳴く猫を抱いて、缶詰の封を開けてやった。皿に入れると勢い良くかぶりつく。太らないように量を調節しているので、毎回思ったように満腹にはならないようだ。

ベッドに戻り、横になりながら携帯を弄った。何度か新規メール作成のボタンを押すが本文を作成する前に電源ボタンを押してしま

月館は「休日ならいつでも来い」と言った。なら夏休みでもあの約束は有効なのではないかと考えたが、教師といえども夏休み全日が休日とは限らないと思いき直し躊躇っている。

「いやだ、悩んでる暇があれば確認とればいいだけじゃない」

頭では分かっているのに指が動かない。自分の乙女ちつくな心情に溜息が出た。ああ、馬鹿馬鹿しいと。

酷く憂鬱な気分になって俯せていると、三国から着信があった。出るかどうか数秒悩んでから携帯電話を手にする。

宮野さん、今日なにか予定ある？　ないなら俺と付き合ってたほうが諦めがつくかもしれない。そう思い、鈴は「いいわよ」と返答した。

黒のワンピースにパンプスを履いて部屋を出る。駅まで歩いていき、街に出る快速電車に乗った。乗車時間は十分ほどで読書で時間を潰した。駅に着くと改札口の近くで三国が手を振っていた。

「宮野さんの私服ってオトナっぽいね」

「コーデイネートが面倒だからワンピースを好んでるだけよ」

「その理由もオトナっぽい、というか宮野さんっぽい」

宮野さんっぽい、という部分を頭の中で反芻してみた。私っていう形を私はよく解ってないわ、と鈴は気づいた。

三国といえばTシャツにカーゴパンツというシンプルな格好だが、顔が派手なせいもあるのかそれだけでお洒落をしているように見える。この男が着れば、安売りの服でも十分に着こなしてしまっただ。

二人はとりとめもない会話をしながら街をぶらりと散策した。鈴は店で服を眺めながら月館の普段着を思い出した。皺の入ったワイシャツにスラックス以外の服装を見たことがない。せめてカーディガンでもと思い手に取ったがサイズがわからない。隣でサマーセーターを漁っている三国を見上げてみる。目測では月館は三国と変わらない身長かもしれない、しかし、自信がない。月館はいつも背を

曲げているので鈴の目測では正確さに欠けていた。背を曲げた状態で三国と変わらないのであれば、パツと見た感じよりもずっと背が高いのかもしれない。

服をプレゼントすることは諦めて、カーディガンを手放した。

「月館先生はLサイズだと思うけど、そのカーディガンならXLをすすめるな俺は」

三国の口から「月館」という単語が飛び出したことにより、鈴は少々慌てた。その様子を面白そうに三国は笑う。

「宮野さん、よく月館先生の部屋に行くじゃん。教室にいても窓の外ばかり観て月館先生の姿をよく探しているし、なんとなくそうかなあって」

「私、そんなに窓の外見てるの？」

授業は真面目に受けているつもりであった。月館のことも教室では忘れるようにしていたつもりだったのだが、無意識のうちに彼の姿を探していつというのか。

「うん、俺わかるんだ。宮野さんのストーカーだから」

鈴は目をぱちくりとさせて三国を凝視した。

「たしかにストーカーだわ」

「そうだろう、気がつけば宮野さんばかり見てるんだ、おかげで勉強に身が入らない」

それはどうも申し訳ございません、と謝罪してから鈴は「じゃあ私もストーカーなんだわ」と付け加えた。

「俺は宮野さんを。宮野さんは月館先生を。月館先生は誰かをストーキングしてたりしてね」

「ああ、あの人は……そうね、敢えて言うなら」

そこで鈴は言葉を切った。

「この話やめよう」

「どうして？」

三国は微笑みながら首を傾げる。

「今は三国くんと一緒にいるんだもの」

「俺は聞きたいけどな」

「変だわ、私のことを好きだって言ったくせに」

「うん、好きだから何でもいい、宮野さんの心の中を覗いてみたい」
無邪気にさらりと言う同級生に、鈴は思わず笑ってしまった。

「本当にストーカーだわ、あなた」

二人は店を出て、カフェに入り軽いランチを頼んだ。鈴はさっきの店の紙袋をテーブル横の籠に入れる。少し冷房が効き過ぎていたので、店のブランケットを膝に掛けた。

ほどなくして食事が運ばれてくる。三国はスモークチキンサンド、鈴は具がタツプリと煮こまれたボルシチと穀物パン。ボルシチはお洒落なカフェで作った味がした。

会話は「いつから好きだったの」から始まった。

体育館の壇上で挨拶したときから

どこを好きになったの

最初は声だったわ。それから手、丸めた背中、話し方、目、今はほとんど。

付き合っではないんだよね

そうね、私の一方的な片思い

月館先生はどう思ってるんだろう

迷惑なんじゃないかしら、でも優しいから言わないの。その優しさに私はつけ込んでるのよ

鈴はキャラメルラテを啜った。

「ねえ、こんな話していて楽しいの？」

「楽しいよ、俺、応援したくなった」

「恋敵なのに」

「違うよ、月館先生じゃなくて宮野さんを応援したいんだよ」

鈴が理解しがたいというふうに関国を見つめると、三国は次に出す言葉を探して「うーん」と唸った。それから掌を拳でポンッと叩き「好きな人が幸せになるのが一番幸せ」と言った。

「俺の母親、親父の女癖の悪さとか暴力的なことかに嫌気を差し

て新しい男作って出ていったんだよね。はじめは悲しかったけど、ある日たまたま街中で母親を見つけてさ。そしたら、幸せそうに笑ってたんだ。毎日親父の暴力に耐えて泣いていた母親が笑ってるのを見て、俺は幸せな気持ちになった。そういうことかな」

鈴は驚きの表情を隠せずに、素直に感嘆をあげた。

「聖人君主なストーカーね」

「そうかな」と、三国は両手を合わせてご馳走様のポーズをし、「だって」と続ける。

「宮野さんって頭いいし、大人っぽいけど、いつも本心が見えないんだよね。でも、時々ふと、すごく歳相応の眼をするときがある。

こんな表情もできるんだって驚いた。ねえ、宮野さん」

名前を呼ばれて、鈴は顔を上げた。すると、三国は優しく微笑む。「先生の前でも大人っぽくしてるんでしょ。もっと子供らしくてもいいんじゃないかな。先生を探しているときの宮野さん、とても可愛いよ」

「そんなことを言われても、子供らしいってよくわからない」

「自分に素直になるってことだよ。相手の迷惑なんて考えない」

「そんなことをしたら呆れられてしまう。相手は大人なのよ」

鈴は目を伏せる。例えば今朝のように自分の都合のいいように言葉を解釈してしまうとき、とても幼稚だと自分自身に呆れてしまうのだ。

視線を感じて顔を上げると、三国がじつと鈴を見つめていた。その優しさに満ちた目に吸い込まれそうになる。

「どうして貴方たちは私に甘いのかしら」

「月館先生に聞いてみれば」

鈴は少し顔をしかめた。

「今の台詞、意地悪だわ」

「ごめん」と三国は笑いながら言うと、鈴から視線を外して遠くを見つめた。その視線の先は時を越えたあの日のこと。

「宮野さんは俺に絵を描くことを許してくれた」

三国は語る。絵を描きたいという欲求はあつたが父親に反発している手前、絵筆を持つことを許せなかった。美術室で久々にキャンパスに向かつて後ろめたさが拭えずに、ただ塗りたくっているだけだった。

「そんなとき君が現れて、こう言った。果物を描こうって」
たったそれだけの言葉なのだが、三国は背に感じていた罪悪感が消えていた。

「もちろん、俺の勝手な思い込みだってわかってるよ。でも、そのとき俺は許されたって思ったんだよ。宮野さんにはそういう力があるんだよね」

自宅に戻った鈴はアポロ13に夕飯を与えてから、そのままベッドに寝転んだ。窓から差し込んだ夕陽が猫の毛先をあかね色に染め上げる。

目を閉じて三国の台詞を思い出した。

月館にも何かを許しているのだろうか。だとしたら思い当たることは一つしか無い。

鈴はそつと、耳の裏の首筋をひと撫でした。

何かを許すなど、そういうつもりで傍にいるわけではない。しかし、月館が自分によって許され、少しでも救われているならそれでもいいと思えた。

うとうととし始めた時、携帯電話が鳴った。メールではなく着信音だ。しばらく放って置いたが鳴り止む気配はない。面倒そうにディスプレイを覗き込んでから、慌ててボタンを押した。

電話の向こうから少し戸惑いのある声が聞こえた。自分から掛けてきたくせに、と鈴はおかしくなって笑った。

「あ、いや、すまない。今、少し話してもいいか？」

「構いませんよ。とても暇していたところです」

言葉を濁して話し始めない月館を、鈴は辛抱強く待った。アポロ13が夕飯を食べ終わって鈴の隣へ寝転んだ。猫の狭い額を指先で搔いてやる。

「……君の」

「はい」

アポロ13は気持ちいいのか喉の奥を激しく鳴らした。

「君の、声が聴きたくなつた」

指の動きが止まる。猫は物欲しそうに、指先を舐めた。

「先生……」

体の芯から湧きでてきた熱が手足、顔に広がっていく。熱を帯びた目頭がじわりと濡れる気配がした。堪えていたものが胸の奥から口頭へと溢れ出していく。

「先生、私、今からとても子供っぽいこと言います。だから、子供の戯言と思つて聞いてくださいますか」

低く、静かに「ああ」と言う声が出た。

「先生の、部屋に行つてもいい？」

月館は少し笑い声を出して「いつでも来ていいと言つたぞ」

「うん、でも、本当に行つたら迷惑かもしれないって遠慮してたの」「たしかに、君らしくないな。もっと図々しいのかと思つていたよ」「ひどい」

二人の笑い声が重なる。

「車、出すか」

「いいえ、私に向かいます。今からでもいいですか」

「ほとんど掃除してない、荒れた部屋でもよければ」

「先生がそこに居るなら、それでいい」

電話を切つてから急いで支度をした。玄関を出る前に、器にアポロ13のご飯を追加しておいた。

住所はすでに暗記してある。路線図を頭から引つ張り出してきて乗り換えの手順を踏んだ。駅の改札口は帰宅する社会人で溢れていたが、鈴は波に逆らうように人混みをすり抜けて到着したばかりの

電車に飛び乗った。

大きなビル群に沈んでいく夕陽を眺めて、踊る胸を落ち着かせる。相当に浮き足立っているらしく、おそらくこの景色は電車を降りればすぐに忘れてしまう。

許された。

鈴はそう思った。子供っぽい自分を月館は許してくれた。

喉が渴いて仕方がない。素直になるといっつのはとても緊張するものだ。何度も自分は未成年で子供に変わりはないと言い聞かせながら気持ちを吐き出した。電話を切った後は安心感と高揚感がまぜこぜになった。

「私、もう隠さない。だって、許してくれたんだもの。許してしまつた貴方が悪い」

独り呟いてから、質の悪い感情だと気づいた。でももう遅い。

一度だけ乗り換えて、目的の駅に到着した。駅から五分ほど歩くと、時代遅れの古いアパートが現れた。駐車場には月館の車が停まっている。

はやる気持ちを押さえて、階段を登る。二階、角の部屋の扉を叩く。足音が近づいてきて扉が開いた。

鈴は月館の顔を見るなり勢い良く飛びついた。扉の閉まる音が背後でした。

鈴は月館の胸に顔を埋めていた。月館もまた、鈴の頭を何度も撫でてから強く抱きしめた。狭い廊下に倒れこんだ二人は、床板の冷たさを感じながらお互いを温め合い、そして唇を重ねた。

簾たがが外れた鈴は、寂しがる子猫のように月館の傍を離れようとはしない。さすがに風呂には着いてこなかったが、出てみるとベッドの上にくるまって本を読んでいた。月館の姿を見るなり近寄ってきて隣で本を読み続ける。寝間着代わりに貸したＴシャツとハーフパンツが大きすぎるのか、余計に鈴の身体が小さく感じた。

「ねえ、この人の本、面白いわ」

肩越しに本の表紙を見せてくる。真横から鈴の息遣いが聞こえた。「あ、ああ、篠原教授と言って僕の大学時代の恩師だ。古代遺跡の偉大な研究者の一人だよ」

鈴は「そうなの」と言って顔を離す。月館は小さく息を吐いて、炭酸飲料を飲んだ。本当はアルコールを摂取したい気分だったが、理性を総動員確保しておきたい。

夕方に鈴が自宅に訪れてから何度かキスはしたが、それ以上は進めなかった。歳の差や教師と生徒という関係性が枷になっているわけではない。彼女に電話を掛けた瞬間から教師としてのプライドは捨ててしまった。捨ててしまっても彼女に縋りたいと願ってしまった。

枷は別にある。

鈴に話してしまおうかとも悩む。しかし、話して楽になるのは自分だけだ。

再び溜息を吐き出す。

「今日の先生はとても積極的だったけれど、何か困ったことでもあったのかしら」

息が止まった。嫌な汗が額を伝う。今日は子供らしい姿を見せていたから油断していたが、もとより聡明な娘だ。月館の情念などすぐに感じ取ってしまうのだろう。

「そうだな……、少し弱っていたのかもしれない。慰みが欲しかった」

真っ直ぐに見つめてくる瞳を、まともに受け止められずに視線を

外した。

「情けない大人だろう」

再び缶に口をつけたとき、背中が温かく包み込まれた。

「私を選んでくれて嬉しい」

「本当に君らしくない」

「こんな私いや？」

月館は首を横に振った。

「安心するよ。宮野も普通の女の子なんだな」

「あら、じゃあ今まではどんな風に思ってたの」

「冴えない中年教師を誑かす風変わりな子」

「もう、今日の先生は本当に酷いことを言うのね」

鈴はしなやかに身をくねらせて目の前に回り込んできた。膝の上に跨り、月館の手から缶をもぎ取って自ら飲む。細く白い喉が規則的に動いた。勢い良く飲み干したせいか口の端から水分が垂れ、顎から首と流れ、鎖骨で堰き止められた。

「私、初めて貴方を見た時から広大な迷路の中へ落とされた気分だったの。先生はきつと、自分のどこに惹かれたのか訊いてくるはずだから答えを探していた。でも」

「紅い唇がぬらりと光る。」

「ありふれた言葉だけど、好きになるのに理由なんかないんだわ」

「たくさんの人間が辿り着いた言葉には真理が隠されているものだ」

「うん」

口元を拭こうとする手を月館は掴んだ。顔をそつと近づけて鎖骨に溜まった水分を吸い上げる。そこから首筋、顎、口と丁寧に舐め上げていった。ん、と声が洩れる。「先生」と呟いた鈴の目は少し潤んでいた。

「先生の命、私にください。その代わりに私の命、貰ってくださいませんか」

「宮野……」

「他人の命なら大事にしたくなるでしょう」

初めて首を吊ったのは高三の夏だった。精神的な病に侵されたいたというよりも、自分の命を粗末に扱ってしまったのは生まれ持ったひとつの個性でもあるかもしれない。それが受験や家庭の事情での疲れで増長されていった結果だった。この時は身体の重みに耐え切れなくなったドアノブが壊れて生き延びた。テレビで観るようには手くいかないと知った。

そんな月館を夢中にさせたのは人が紡いできた歴史であった。特に遺跡に行くと、当時の人々の息遣いが聞こえてくるような気がして小さな頃から親にせがんで旅行がてらに連れて行ってもらっていたように思う。親としても、息子の唯一の興味の湧くものを見せてあげたかったのであろう。旅行は国内にとどまらず海外にも及んだ。中でも驚愕したのはポンペイの遺跡であった。古代ローマの商業都市の一つであり少なくとも一万二千人以上がこの都市で暮らしていたとされる。しかし一九五〇年前の火山噴火により火砕流に飲み込まれ、一夜にして街は五メートルもの灰の下に埋まってしまった。シリカゲルのような成分を多く含んだ火山灰のおかげで、現代になっても当時の壁画や美術品が美しい姿のまま発掘された。人形ひとがたの空洞も多数残っており、考古学者たちがその中に石膏を流しこみ遺体を再現したものであった。

ある家族は折り重なるようにして倒れていた。一番上に男性が、その下に女性と子供が蹲っていた。夫が妻と子供を守ろうとしたのだ。月館はその姿を見て、己の命さえ守ろうとしない者が他人を守れるのだろうか、と自問自答した。その答えは「否」であった。

この時、月館は半ば絶望していた。独りで生きていくほうが他人に迷惑を掛けないで済む。しかし、それは生きていけると言えるのだろうか。

人は、いつでも人と繋がり求めてきた。誰かと交わることで歴史がひとつひとつ刻まれていったのだ。なら独りで生きようとすると自分は一体どうやって生きている証明をするのだろうか。

二度目に首を吊つたのは母が死んで幾日か経った頃だった。父はとうに家を出て行方はわからず、月館はいよいよ独りになった。

椅子を蹴り、首に圧力が掛かる。動脈が締め付けられ意識が遠のく。

苦しさはあまり感じ無かった。

夢を見た。もしかすると幻想かもしれない。

火山灰が降りしきるポンペイの街を走りまわっていた。逃げ惑う人々と怒号。目の前に家族を守ろうとする男がいた。

月館はその男を羨ましく見つめていた。そのうち、月館にも火山灰が覆いかぶさり視界は暗闇に墮ちる。自分は、独りだった。

激しい衝撃が身体を襲い、月館は覚醒した。何度も咳き込み、肺に空気を送り込む。咳はやがて嗚咽に変わり、月館は身を丸めて泣きました。

僕は、誰かを愛してみたかった

すでに月館の理性は半分死んでいた。手放して何度も愛を叫んでしまいたいようになる。全力で気持ちをつぶつけてくる鈴が恐ろしい。

掌がじわりと汗ばむ。

シャツの裾から入れた手に肌が吸い付いてくる。胸元に顔を埋めると石鹸と別の甘い香りがした。

「君を、僕のものにしたくてたまらないよ」

腹の底から湧きでてくる感情を押さえつけながら囁いた。こんな言葉を言えば鈴は自分の手を引っ張ってくれとわかっていた。言うべきではない言葉だとわかっていて。彼女を愛することを、彼女

に許されたいなど卑怯と自分を罵りながら月館は彼女を強く抱きしめる。

「私を愛すると、先生は苦しいの？」

「苦しいよ。君に迷惑をかけたくない」

鈴は月館の頭を、優しく撫でた。それから両手で頬を覆い、唇に触れてくる。

「ねえ、先生。自分のために私を愛して」

鈴は頬を赤く染めて微笑みながら涙を一筋流していた。

この時月館は鈴の部屋を思い出した。小さな本棚とテーブルとベッドと、黒い猫。ひとり分の食器、冷蔵庫。

月館が本をたくさん積み上げているのは本に囲まれていると孤独を感じないからだ。物言わぬ本だが、集積すれば煩い。部屋を暗くすると、途端にそれぞれが独り言を言い始める。本棚に片付けてしまつと声は小さくなる。

鈴の部屋は何も無い為、とても静かだった。それだけに黒猫の存在が妙に大きく感じられた。この孤独と静寂に満ちた部屋で、彼女は毎夜、誰を想っていたのだろうか。

月館は鈴の口を貪り食べていた。今までの優しいキスとは違う、貪欲で感情を剥き出しにした荒つぽいやり方だ。それは身体にも及んで、自分の痕跡を残すように強く吸い上げる。

他の誰のものでも、誰の手にも渡しはしない、自分の所有物にするために。

月館にとって身体を重ねることは子孫繁栄でも愛情表現でもない、ただ独占欲を示すだけの行為でしかない。

この子が欲しい、宮野鈴が欲しい

たぶん、今、自分は怖い顔をしているのだろうと、逃げ出さないように両腕を掴む。

月館の下に組み敷かれた鈴は、小さく忍び泣いていた。痛いのかと聞くと、違うと言う。言葉の代わりにキスをせがんてきた。

夜が明ければ、自責の念に押しつぶされることだろう。しかし、

それは彼女を愛してしまつた責任と背負うべき苦しみなのだ。自分を大事にしてこなかつたツケが回つてきたと思つしつかない。

それでも彼女を手に入れる決意を固めた。同時に失う覚悟もできた。

広大な草原の中、朽ちた石造りの建物がある。数千年前に建られた建築物は人が寄り付かなくなり、ところどころの壁や床が抜け落ちて、そこで人が生きていた痕跡は消えない。

月館の中の鈴も、そうやって生き続けるのであろう。永遠に、永遠に。

数日後、月館は珍しく部屋を掃除していた。本を一つ一つ丁寧にダンボール箱へ入れていく。貴重なものはかつての恩師の元へと旅立っていく。それ以外はビニール紐で縛つて部屋の隅へ置いた。

ひと通り終わつて、壁に寄りかかり煙草に火を着けた。久しぶりに吸う紫煙は目に染み込んだ。

目を閉じると、鈴がいた。微笑んでいた。月館も笑い返した。遠くから階段を登る足音がした。足音はいくつも重なっている。

それから月館の部屋の前で停まり、ドアをノックされた。

煙草を空き缶の中に押し込み、ゆつくりと立ち上がつて玄関へ赴いた。

ドアを開けると数人の男が立っていた。

「話が訊きたい」と男の一人が言った。

月館は「ちょうど掃除が終えたところです。行きましょう」と行きかけたところで再び玄関に戻り、椅子に掛けてあつたカーディガンを手にとつた。

「冷えてはいけませんから」

月館は穏やかに言った。

男達は頷くこともせず、月館の腕を掴んで階段を降りていった。

1
1

月館が辞表を提出していたことが発覚したのは夏休みが明けてからだった。すでに覚悟していたのだと、鈴は思った。

覚醒剤所持の罪で逮捕されたときは、この学校の教師ではなかったためにメディアでは報道されなかった。それでも、生徒たちはどこからか事件を聞きつけて噂する。その中に真実はいくつも無い。

月館が逮捕された翌日、鈴のもとに手紙が届いていた。月館からだった。今回の事件に関してのことが触れられているだけで、とても事務的な内容だったが、鈴はそれだけで月館の今までの苦悩が手に取るように感じた。

そして、やっと、広大な迷路の出口が分かった気がした。あとはその出口に向かって走りだすだけだ。

学校にいる間は、心配した三国が時折、鈴の様子を確認しに現れた。しかし、鈴の迷いのない瞳を見て

「君はきつと、遠いところへ行ってしまいそうだな」と笑った。

「そうね、行ってしまいかもしれない」と鈴も笑い返す。

「じゃあ、今のうちに報告。俺、美大に行くことにした。絵を続けるよ。でも、これで食べていくかはわからないけど」

「そっか、いいね、いつか私をモデルにしてくれる？」

「ヌードならいつでも」

こんな風に軽口を叩いてくれる三国に助けられていた。三国も、つかず離れず、鈴のことを見守っていた。

外に出た。雨が降っていた。アスファルトが濡れて、街灯を反射させている。

空を見上げた。今は夜だ。だけど何かおかしい。街中のイルミネーションが、どんよりと湿っている雲を照らしており、向こう側に太陽があるみたいだった。

変だ。今は夜なのに。

ビルとビルの間から覗く空が夜の色じゃない。

駅近くのカフェから、空を眺めた。三国も気づいていたみたいで「夜なのに昼みたいだね」と言った。

「宮野さん、〇〇大に受かったんだね。おめでとう、すごいよ本当に」

「勉強しかやることなかったしね」

「だからって受かるものじゃないよ。何か強い意思がないと」

「そうね、そうかも」

鈴はコーヒを一口飲んで、再び空を見上げた。

「私ね、試してるの。あの人が約束を守ってくれるのか」

「守ってくれていたら、どうするの」

「こつこつ時、「破られたら」と訊かないところが、鈴の好きなところだった。」

「カーディガンよりももつと素敵なプレゼントを用意するわ」

「へえ、どんなものなんだろう。すごく気になる」

鈴は三国の顔を眺めた。この一念、三国には世話になったと自覚がある。それだけに三国には隠し事はしたくはなかった。

「それはね」

後に、この時鈴の話した会話がきっかけで、三国は大学で洋画を学び絵画修復の会社へ就職することになる。

三年後

鈴は北海道のとある歡樂街に来ていた。もうすぐクリスマスのか、やけに派手な電光飾りで店は着飾り、なにやら騒がしい。道の端に雪が残っている。今振っている粉雪も明日になればまた、この道を白く埋め尽くしてしまうのだろう。

慣れない北国の道を、鈴は転ばないように歩いていた。寒くて鼻が凍えそうになり、マフラーに顔を埋める。

メモを見ながら、店を一軒一軒確認していく。

ある洋菓子店の前で、一匹のトナカイがいた。とは言っても本物ではなく、キャラクター風にデフォルメされた着包みだ。トナカイは手にしている看板を通行人に見せることなく、じいっと洋菓子店に陳列されたケーキを見ていた。食べたいのかもしれない。

それにしても、風俗店の看板を持ったトナカイなど洋菓子店の前にいられては営業妨害ではないのかとも思ったが、クリスマスのせいか客たちは気にせず店に入っていく。

鈴は静かにトナカイに近づいていった。近づいてくる鈴にガラス越しに気づいたトナカイは振り向いて、そのまま静止した。トナカイの表情は笑顔で固定されているが、どこか慌てた様子が伝わってきた。それがおかしくて、鈴は笑ってしまう。

「やっと見つけた」

鈴がさらに一歩近づくと、トナカイは背を向けてしまった。

「約束、守ってくれて嬉しい、先生」

「もう、先生じゃない」

トナカイからくぐもった声が聞こえてきた。

「そうね、じゃあ、昇流さんでいいのかしら」

トナカイは躊躇いがちに、振り向いた。

「僕の命は僕のものじゃないから、死ぬことはしないよ」

「でも、私の前に現れてくれなかった。どうして？」

二人の間に沈黙が流れる。

「ごめんなさい、今のはナシにして。ずっと寂しかったから意地悪をしてしまったの」

するとトナカイは大きな顔を横に振った。

「いいや、いいんだ。本当なら、こうして迎えに来てくれるのも奇跡なんだ。もう会えなくなっても仕方がないと思っていたから」

「私のこと、嫌いになってしまったの」

「まさか……」

忘れた日など一日もなかったと、トナカイは言った。

空から降ってくる雪の塊が大きくなってきた。ふんわりとトナカイの頭に積もっていく。鈴の頬にも雪が触れ、すぐに溶けて消えてしまった。

「私ね、今、〇〇大の藤原教授の研究所にいるのよ。先生の後輩になったの」

「いい教授だろう」

「ええ、とても。でもお年を召してらっしゃるから、そろそろ引退なさるみたいなの」

それで　と鈴は続けた。

「最近、E国で新しい遺跡が埋まっていることが発見されたの。新聞にも載っていたけどご存知かしら」

「ああ、たしか百数個の遺跡が砂の中に埋まっているとか」

鈴は嬉しくなって微笑んだ。

「そう、それです。その遺跡の発掘調査が始まったので藤原教授にもお呼びがかかったんですが、引退間近なので断ったんです。だから

ら、私はね、では代わりを見つけてきますってここまで来たんです」
トナカイはまた、大きな顔を横に振った。

「僕はできないよ」

「藤原教授は、月館くんなら任せられると仰ってたわ。とても優秀なんですってね、先生」

「他にもいるだろう」

「先生じゃないとダメなんです」

「何故」

「私がそういう条件なら、現地に行くと言ったからです」

「そんな道理が通用するはずがない」

「その発掘調査のスポンサーに父も一枚噛んでいるんですよ」

トナカイは大きな頭を抱えてしまった。目の前に開かれた新しい道に、怯えているようだった。

「先生……」

鈴はトナカイの大きな顔を両手でつかみ、引き抜いた。

中には無精髭の生えた月館がいた。鈴は、月館の顎に手を伸ばし、髭を撫でた。その手を月館は掴んで頬に引き寄せる。月館の頬は温かく、冷えた鈴の手を温めた。

「君の元に、帰っていいんだろうか」

「私は先生と、先生は私と、でしか温め合えないのよ」

いつの間にか洋菓子店の前にいたトナカイは消えていた。

店の主人は、女の子と共に雪の中へ歩いて行ったのを見ていた。

おわり

(後書き)

スランプのときに友人と企画した小説です。「とにかく好きなように書いてみよう」ということでした。もしかしたら何かに影響されている部分はあると思います。そのためにしばらくは身内だけで公開していましたが、無料というこの場で公開することにしました。楽しんでいただけたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418u/>

月館と鈴

2011年6月26日01時25分発行